



「言った」から「伝わった」へ～自ら考え、行動できる子に～

学 校 長

■ 「言ったこと」と「伝わったこと」の違い

学校やご家庭で、大人が「言った」「説明した」つもりでも、子どもにうまく伝わっていなかったという経験はありませんでしょうか。大人が言葉を発した「言ったこと」と、子どもが理解した「受け取ったこと」は別の問題です。言葉が耳に入る「感覚器に入ったこと」と、それを自分の頭と心で深く受け止めることの間には大きなズレが生じるからです。

ただ指示されて受動的に「聞かされる」だけでは、どれだけ手が動いていても、子どもたちの頭や心が動いているとは限りません。本当の意味で言葉が「伝わる」ためには、子ども自身が「なぜだろう」「自分は思うか」と自ら問いを立て、主体的に耳を傾けようとする姿勢や気持ちが何より大切になります。

■ 生活科・総合的な学習での主体的な挑戦

今年度、本校では、子どもたちが自ら問いを立て、探究する『生活科』や『総合的な学習の時間』の学びを推進しています。

- 学校や地域の「すてき」再発見：並木小・地域の魅力を探る取組
- 感謝を込めた「環境美化活動」：並木小をきれいにして閉校する取組
- 学校があった「証（あかし）」を残す取り組み：並木小を未来に伝える取組

これらは大人の指示による取組ではなく、子どもたちが「どうすれば思いが伝わるか」を考え抜いて進める学習です。現在、11月に行われる閉校記念祭に向けて取組を進めています。



■ 子どもたちを「受け取る主体」へ育てるために

教育において大人ができるのは、知識や指示を無理に「受け取らせる」ことではありません。子どもたちが自らの意思で「聞き、考え、行動できる子」へと育つ支援です。「どうすればうまく伝わるかな？」とご家庭でもあたたかく問いかけながら、子どもたちが主体的に言葉を受け止め成長していく姿を見守っていただけると幸いです。